

千載和歌集の基礎的研究

有吉

有吉保編
日本大学千載和歌集研究会

千載和歌集の基礎的研究

笠間書院刊

千載和歌集の基礎的研究

●笠間叢書 57

昭和51年3月20日 初版発行

¥ 8.000

検印
省略

編著者 有 吉 保 編
日本大学千載和歌集研究会

発行者 池 田 猛 雄

発行所 有限会社笠間書院

〒 101 東京都千代田区神田神保町 1-46

☎ 03-294-0787・0996 振替東京 1-56002

3391-951057-0924

大文社印刷所・手塚製本所

凡 例

- 一 本書の本文は、静嘉堂文庫所蔵の、伝冷泉為秀筆千載和歌集上下二帖を主に用い、同本の若干の欠脱部分は八代集抄本等により補った。また、久保田淳・松野陽一氏校注『千載和歌集』（昭和四四年九月 笠間書院刊）を参考にさせていただいた。
- 一 歌番号は、国歌大観本の番号による。
- 一 巻末に索引を添えた。それぞれの凡例を御参照いただきたい。

有吉保編

千載和歌集の基礎的研究

凡例

第一章	四季部の配列構成	一
-----	----------	---

第一節	春部	一
-----	----	---

第二節	夏部	二五
-----	----	----

第三節	秋部	三七
-----	----	----

第四節	冬部	六
-----	----	---

第二章	離別部の配列構成	七
-----	----------	---

第三章	羈旅部の配列構成	七
-----	----------	---

第四章	哀傷部の配列構成	一〇三
-----	----------	-----

第五章	賀部の配列構成	一二五
-----	---------	-----

第六章	恋部の配列構成	一二
-----	---------	----

第一節	恋部一	一三五
-----	-----	-----

第二節	恋部二	一四四
-----	-----	-----

第三節 恋部三	一五三
第四節 恋部四	一五五
第五節 恋部五	一五七
第七章 雑部の配列構成	一六七
第一節 雑部上	一六七
第二節 雑部中	一七四
第三節 雑部下	一七八
第八章 釈教部の配列構成	一八五
第九章 神祇部の配列構成	一九五
第十章 入集歌人の分類	二〇三
第一節 時代別区分	二〇三
第二節 系統別区分	二二三
第十一章 撰集資料	二三五
索引	二六九
あとがき	

第一章 四季部の配列構成

第一節 春 部（上・下）

一

千載集春部の構成は次の歌材一覧によって概略の見当がつけられると思われる。ここに見られる歌材は、いずれも古今集以来の伝統の上に立つもので、特に千載集独自のもの（あるいは他集にあって千載集のみが欠いているもの）といった顕著な例はないようである。また、歌数の点からみて、桜・梅・三月尽・山吹などが主要な歌材と目されるが、これも若干の消長はあるものの先行勅撰集にくらべて大きな変化は認められない。ただ、三月尽の一五首という歌数は、後撰集に一〇首があるが、他は二ないし七首であり、八代集中群を抜いた歌数であるので、この点については注目しておきたい。

春部の歌材について、右の如き大略の見通しをもとに、以下配列構成の検討を試みたいと思う。

春部歌材一覧

春部上

春部下

立春	3	梅	16	桜	29	三月見	15
残雪	1	春雨	3	難波春	1	(計 歌材数一八、歌数二三五首)	
鶯	2	早蕨	1	呼子鳥	1		
霞	5	春駒	1	董	3		
子日	1	帰雁	4	山吹	7		
若菜	2	桜	37	藤	3		

註 右の表は風巻景次郎氏『新古今時代』所載「八代集四季部の題における一事実」(風巻景次郎全集 6 桜楓社昭和四五年一〇月刊)、岸上慎二先生『中世文学Ⅱ——八代集四季歌各季の歌題排列一覧——』を参照したものであるが、私見により若干改めた点を次に掲げる。(イ)「立春」：風巻氏・岸上先生ともに四首とする。国歌大観番号4は詞書に「残雪をよめる」とあるので、右の如く立春3、残雪1としたい。(ロ)「春駒」・「帰雁」：該当する歌は35と39である。風巻氏は各一首・一首、岸上先生は同じく一首・四首とする。35「春駒の歌とてよめる」とあり、36と39は「帰雁」の題をもっているので、岸上先生に従うべきであろう。(ハ)「山吹」：111と117が該当し、風巻氏が二首とするのは誤りであろう。

立春(三首)・残雪(二)・鶯(二)に属する計六首(国歌大観番号1と6)について考えてみたい。まず立春三首は、

春立ちける日、詠み侍りける

源俊頼朝臣

1 春の来る朝の原を見渡せば霞も今日ぞ立ちはじめける

堀河院の御時、百首の歌奉りける時詠める

中納言国信

2 三室山谷にや春の立ちぬらん雪の下水岩たゞくなり

百首歌奉りける時、初めの春の心を詠める

待賢門院の堀河

3 雪深き岩のかけ道跡絶ゆる吉野の里も春は来にけり

であるが、1 朝の原、2 三室山、3 吉野といずれも名所が詠まれており、空間的な展開を軸とした構成意図が考えられる。これに続く残雪・鶯の三首についても、4（残雪）は「道絶ゆ」といひしものを……消ゆるは惜しき去年の雪」が前歌の「雪深き岩のかけ道跡絶ゆる」と緊密につながりながら、背景としても山里をもっており、あるいは3の「吉野の里」のイメージに結びつくものかとも思われる。5・6は初期の鶯を詠んだ歌で（梅に添えられた鶯の詠は、後の梅歌群の中に置かれている）、それぞれ「雪の下水うち解けて」、「霞まぬ先に」とある点に前後の残雪、霞詠との脈絡が認められるが、ここでも谷、山里という背景があり、その意味では（名所でこそないが）立春三首の延長線上にあるものとみられる。一方に4「消ゆる……去年の雪」、5「春立てば」、6「春やしるからん」と、立春につながる要素を含んでいることと考え合せて、その点に撰者の構成意図を考えてみたいのである。

また作者をみると、巻頭歌俊頼以下、国信・待賢門院堀河・匡房・顯綱・隆国ら、大略後拾遺・金葉集期の歌人（久安百首作者堀河も金葉集に初見）であって、当代歌人は8に至って摂政前右大臣兼実が見られる。俊成は金葉集について「金葉集は、撰者のさほどの歌人に侍れば、歌どももみなよろしくは侍るを、少し時の花を折る心の進みけるにや、当時の人のみ始めより続きだちたるやうにて、いかにぞ見え侍るなるべし」（古来風体抄）と述べており、金葉集の当代歌人偏重の傾向を指摘しているものと思われるが、千載集の場合を考えるのに示唆的な内容をもっていると思われる。^{註1}

霞。7・11、五首。7は霞み初めた状態を詠んでおり、一連の冒頭に位置するのにふさわしいと思われる。8は、前歌7が忠通の内大臣時における十首詠のうちの一首であるのに対して、その子兼実の右大臣時における歌合からの選入である（作者も兼実）。海上の霞を詠じたものであるが、同歌合の判者俊成は、特に下句「緑を分くる沖つ白波」

に注目している様子があり、勝を与えている。^{註2} 9・10・11は一転して山の霞（袖振山・三輪山）の詠で、9「袖振る山も……霞の衣たちわたりける」、10「杉のしるしも見えぬかな霞ぞたてる」、11「そことしるしの杉もなし霞の内や」の如く、各々その場所（名所）にふさわしい内容といえよう。以上、7室の八島の霞から10・11三輪山の霞まで、8の海上の霞（海の霞の例は先行勅撰集中、後拾遺集の一例があるが、内容からみて純然たる霞詠とは扱い難い）を除くと、名所の霞の詠ということになる。また一方、内容をみると、霞み初める状態から、「しるしの杉」も見えぬまで立ちこめた霞に至るまで、霞それ自身の景としての展開が認められるように思われる。

この点を先行勅撰集と比較してみたい。霞詠が一連として配されているのは、拾遺・後拾遺集各四首、金葉集三首、詞花集二首の如くである。これらを見ると、例えば、

平定文が家の歌合に詠み侍ける

壬生 忠 岑

1 春立つといふばかりにやみ吉野の山も霞みて今朝は見ゆらん

に代表される立春と結びついた霞が主流をなしていることが指摘できよう。それは右の歌を含めて拾遺集の霞四首を風巻景次郎氏は立春一首の中に数えておられること（詞花集二首についても同様）、逆に、左の後拾遺集の如く立春詠中に霞を詠みこんだ用例が見られること、

春立つ日、詠み侍りける

橋 俊 綱 朝 臣

4 逢坂の関をや春も越えつらむ音羽の山の今朝は霞める

寛和二年、花山院の歌合に詠み侍りける

大中臣能宣朝臣

5 春の来る道のしるべはみ吉野の山にたなびく霞なりけり

また、霞詠が立春の後、子日・若菜の前に配されていることなどからも窺えよう。ただ後拾遺集（38～41）のみは立春とは結びつかないように思われ、位置も子日、若菜の後に置かれている（古郷―都―山里・海の霞である）。

このように見ると、名所の霞詠という意味では後拾遺集を除いて、拾遺・金葉・詞花集ともに先例があり、むしろ伝統的な配列法といえるが、その反面、内容面から見ると、千載集の場合、立春と結びつくものではなく前述の如く、霞それ自身の景としての展開が認められること、換言すれば、配列構成の上で他と紛れることのない独立した位置を与えられることになり（立春との間に残雪・鶯計三首が置かれている）、五首という数もその意味において、紛れのない霞詠歌群を表わすものとして評価する必要があると思われる。

子日（一首）・若菜（二首）、12・14。古今集以来の伝統的な歌材である。正月初子の日に（12の第四句「初子を祝ふ」とある）野に出、延命のために小松を引き、若菜を摘み、宴遊が行われる年中行事である。なお13の詞書に「正月七日……」とあるが、元来これは「供若菜」（七種祝）であったものを、子日の若菜が吸収融合したとされる。^註歌の内容をみると、12「ときはなる松もや春を知りぬらん」には前歌11（霞）「そことしるし（知る・印）の杉」とのつながりが認められ、13・14は若菜の名所春日野を詠み、13「雪の下草かき分けて」、14「雪を若菜に摘みそへて」と、ともにまだ雪の残る中での若菜の詠が配されている。これは、以下に続く梅の詠歌群の冒頭に、「正月廿日頃、雪の降りて侍ける朝に……」と、ことさら詳細な日付の記載のある梅+雪の詠（贈答歌）が置かれていることから、七日から二十日へ、雪を軸として、スムーズでかつ明確な移行を企図した配列ということができよう。

梅。15・30、一六首。一連の歌群としては春部において、桜に次ぐものである。先行勅撰集を見ると歌数の上で若干の消長が見られるので、まずその跡をたどってみたい。梅歌の歌数とそれが春部総歌数に占める割合（％）は次の如くである。

古今集	一七首	一二・七％	後拾遺集	一六首	九・八％	千載集	一六首	一一・九％
後撰集	一九首	一三・〇％	金葉集	五首	五・一％	新古今集	一六首	九・二％
拾遺集	一二首	一五・四％	詞花集	二首	四・〇％			

右の表によると、梅歌の春部に占める比率は、三代集においてはほぼ同じ状況にあり、後拾遺集以後漸減し、千載集に至って再び三代集に近い傾向を示していることが認められる。これをさらに春部の他の歌材と比べると三代集及び千載集では、桜に次いで第二位の歌数を占めるが、後拾遺集ではさらに立春に次いで第三位、金葉集では立春・藤・三月尽に次いで第五位、詞花集では春駒・柳に次いで第四位、霞・若菜・子日・山吹・三月尽等と同数である（もっとも、金葉・詞花両集の場合、十卷仕立てであり、総歌数も少ないことから、歌数が平均化する傾向は認めておく必要がある）。次に梅詠歌が増加したことについて、内容面の検討をしてみたい。

まず、一連一六首を便宜15～21のA群、22～30のB群の如く分けると、A群の作者は、俊忠・俊頼・顕輔・雅実・師頼・匡房・公能で、おおよそ金葉・詞花集期の歌人ということができよう（公能は、永暦二年に没している点、厳密には当代に属せしめることになろうが、その詠は久安百首を出典資料とするものであり、構成を考える目安として大きく金葉・詞花集期に括ってさしたる誤差は生じないと考える）。15・16・17の三首は梅に雪がそえられた詠で、15・16は俊成の父俊忠と俊頼の贈答歌で、前歌との関連については前述した。17はさらに鶯がそえられた詠であるが、久安百首を出典としながら（俊成の部類本久安百首では残雪詠となっている）「梅の木に雪の降りけるに、鶯の鳴きければ詠める」と異例とも思われる詞書になっているのは、前の贈答歌との関連を考慮して、実際の景を詠んだものであるかの如く、意識的に改めたものであろうか。^{註4} 18・19は「薰る香の絶えせぬ春は」「今よりは梅咲く宿は」の如く、香と花を詠んでいるが、現実には、咲いているものではなく、観念の世界、あるいは咲く以前の梅であって、前歌正月二十日頃の、まだ雪とともに詠まれる初期的な梅とはまた異なった意味での梅詠歌群の序的な役割を担っているものといえよう。20・21も「匂ひもて分かばぞ分かん」、「梅の花折りてかざしにさしつれば」と、同じく香・花を詠んでいるが、18・19にくらべて、香・花の具体的な景が見られる点に差異が認められる。なお、両首はともに古歌を下敷とした跡が歴然としており、特に21の場合は、和漢朗詠集「折梅花挿頭、二月之雪落衣」の翻案とさえ見られる。その意味では、配列構成

上に見られる千載集独自の境地は、むしろ22以下のB群に認められるかと思われる。

B群は22～26の夜の梅一連から、28・29に見られる曙の梅への時間の推移をたどることになるが、まず夜の梅一連を先行勅撰集のそれと比較することから検討をはじめたい。

古今集

くらぶ山にてよめる

貫 之

39 梅の花匂ふ春べは倉部山闇にこゆれどしるくぞ有ける

月夜に梅の花を折りてと人のいひければをるとてよめる

躬 恒

40 月夜にはそれとも見えず梅の花香を尋ねてぞしるべかりける

春の夜、梅の花をよめる

41 春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るゝ

後拾遺集

春の夜のやみはあやなしといふ事をよみ侍りける

前大納言公任

52 春の夜の闇にしなれば匂ひくる梅より他の花なかりけり

題しらず

大江 嘉言

53 梅の香を夜半の嵐の吹きためて槇の板戸のあくるまちけり

（後拾遺集の場合は二首であるが、前歌51が夕暮の梅、53には夜から朝への経過が想像されることから、一連とみられよう。）

歌群を構成するものとしては右の二例である。これらは後拾遺集53を除くと、夜（闇・月）―花―香を共通の素材としてっており、花を隠す闇（月にしても同様）、その花の存在を確める香というように、夜を媒介として花と香が表裏一体の関係で詠まれているということができよう。これに対して千載集の場合を見ると次のようである。

題しらず

上東門院の和泉式部

22 梅が香におどろかれつゝ春の夜の闇こそ人はあくがらしけれ

藤原道信朝臣

23 さ夜ふけて風や吹くらん花の香の匂ふ心地の空にするかな

皇太后宮大夫俊成

24 春の夜は軒端の梅をもる月の光もかはる心地こそすれ

崇徳院御製

25 春の夜は吹きまふ風の移り香を木ごとに梅と思ひけるかな

源俊頼朝臣

梅花夜薫といへる心を詠める

26 梅が香はおのが垣根をあくがれてまやのあたりに隙もとむなり

まず作者は、竜門文庫本千載集が後入歌であると注する^{註5}24をかりに除くと、拾遺・詞花集期の歌人であり（崇徳院については、21公能と同じく扱いたい）、その点A群から引き続いているものと見られる。ここまでを総括しての前代歌人群は、27・30に文字通りの千載集期の歌人が並ぶだけに注目しておきたい。内容についてみると、22夜（闇）―香に、さらに23・25夜―香―風と、香が風に運ばれ、^{註6}26夜―香も「垣根をあくがれ」る香が詠まれている。つまり香そのものに焦点があるのであって、古今集・後拾遺集の例の如き夜―花―香の関係を見ることはできない。このことは24を置いてみる時、より明確に意識される。即ち、23・25「風や吹くらん」、「吹きまふ風の」で結びあっていた脈絡が、両者の間に24が位置することによって絶たれる一方、「月の光もかはる心地こそすれ」の鮮明な印象によって、23「花の香の匂ふ心地の空にするかな」、25「移り香を木ごとに梅と思ひけるかな」を再度確認することになる。^{註7}

次に27・30をみると、実定・守覚・実家・定房ら当代歌人による一連で、27を隔てているものの28・29の曙によって、前歌群の夜からの時間の流れの上に位置させることができる（前述）。27・29の三首はともに鶯を配した詠で、そのうちの27・28は引き続き香を詠んだもの、28・29は「春の曙」（木伝う鶯）で結びあっている。特に27・28にみられる「梅が香に声移りせば」、「声さへ匂ふ」の如き把握は先行勅撰集に例は見られず、さらに28・29の春の曙は新古今的な歌材として指摘されているが、それが（歌材としてではなくとも）配列構成の面で意識的に取り上げられていることは、歌人構成をも考え合せ、当代的な、いいかえれば千載集的な一面をそこに見出し得るのではあるまいか（三代集以後、春部における梅詠が漸減の傾向を示す中で、千載集が再び三代集なみの比率を有している実体を右の点に見たいのである）。次の30は梅歌一連の末尾に位置し、「心は色に見ゆらん」は、次の春雨詠「かぞいろかとや」へのつながりが認められるが、梅詠一六首一連の中で見る時、この歌は「二月ばかり、花咲きたる枝に結びつけて、皇太后宮大夫俊成許に」定房よりおくれた歌であり、冒頭の「正月廿日頃……」の俊忠と俊頼との贈答歌と首尾照応する形になっていることにも留意しておきたい。

春雨（三首）・早蕨（一）・春駒（二）。 31・35。まず他の勅撰集における各入集状況をみると次の如くである。

春雨 後撰集 2（8011）。新古今集 4（64・67）。

早蕨 金葉集 1（75）。新古今集 1（32）。

春駒 後拾遺集 2（4546）。詞花集 2（1112）。

この数字に見る限りにおいては、特に際立った傾向も認められず、春部の歌題としては十分定着してはいない模様である。ただ春雨については、古今集以後、羈旅・恋・雑部などで、主として涙、物思いにつながる素材として詠まれているものを取り込んで（33。その場合は勿論配列意図としては季感に主眼を置いている）、千載集では三首となっている点、次の新古今集の四首（詠歌内容は異質である）という数字との関係を考える上でも注意しておきたい。

春雨三首は、31「四方山に木の芽、春（張る）雨」、32「裾野の原、ぞ浅緑なる」に配列上の関連が認められ、33（和泉式部）「つれづれと降れば涙の雨なるを」は、32「降り初めし」からの変化が見られる一方で、述懐的な色彩の濃い歌である（宸翰本和泉式部集では詞書に「もののおもひ侍しころ」とある）。

続く早蕨の

堀河院の御時百首歌の内、早蕨を詠める

藤原基俊

34 深山木の蔭野の下下蕨萌え出づれども知る人もなし

は、「萌え出づれども」が春雨詠31・32に結びつく面をもっているが、33に連続しているだけに述懐調を詠みとることにしろ（作者基俊は道長の曾孫で、右大臣俊家を父としながら従五位上左衛門佐で終っている。^{註9}）そして35春駒「水籠りに蘆の若葉や萌えぬらん」は、前歌の第四句目までと密接につながっている。このようにみると、便宜右の五首を一括したのであるが、述懐色を漂わせる二首を折りこみながら、相互の脈絡は、31山―木の芽張る、32野―浅緑、34山―萌え出づ、35沼―萌えぬ等、むしろ副次的な要素によって保たれているとみることができよう。

帰雁。36・39、四首。これについては有吉保先生『新古今和歌集の研究―基盤と構成―』の中で、新古今集的特徴のよくあらわれている歌材として注目され、八代集を展望し、千載集についても言及されている。即ち、(イ)入集歌数の上では、千載集・新古今集が注目される（後拾遺集六首のほか、古今く詞花集各二首、新古今集八首）。(ロ)詠歌内容を見ると、多くが漢の蘇武の故事に由来することは当然として、霞や花と共に詠まれている（新古今集では、月・春雨の例に注目されている）。(ハ)千載集の場合は表現技巧の上で注目され、哀惜痛切さを脱却して景物の一端として詠まれている。作者の主情と雁という素材の持つ哀れさが融合しており、新しい境地が開拓されている、の如くである。そこで一連四首をみると、36「今はとて帰る雲路に思ひ立つなり」は冒頭の位置にふさわしく、37「浮雲と一つになりぬ帰る雁がね」、38「天つ空一つに見ゆる越の海の波を分けても帰る雁がね」と密接に関連をもちながら展開し、39は「い

く雲居とも知らず帰る雁に「心ばかりをたぐへてぞやる」のである。ここには前掲(四)の如き従来の帰雁詠の傾向はかげをひそめ、(六)の如き、作者の主情と雁という素材のもつ哀れさとが融合し、それが一つの景として展開するといふ構成を見ることができる。

桜(一)。40～76、三七首。春部下の桜(落花)と区別する意味で桜(一)とする。歌数が多いので、便宜細区分しまとめおくこととする。

まず、	桜(一)		
(イ) 群三首は、	(イ) 花を待つ	40～42	久安百首
	(ロ) { 花見御幸	43～47	} 賀的
	(師実関係)	48～52	
	(ハ) 心情を寄す	53～55	
	(ニ) 山の桜	56～61	久安百首・結題
	(ホ) 心情を寄す	62～64	
	(ヘ) 名所	65～68	
	(ト) 盛りから落花へ	69～76	巻末部
	桜(二)		
	(カ) 落花の序	77～80	
	(キ) 落花を惜しむ	81～83	後拾遺歌人
	(ク) "	84～86	堀河百首
	(ケ) 名所(志賀)	87～89	詞花・千載歌人
	(コ) 落花を惜しむ	90～92	千載歌人(権門)
	(セ) "	93～97	" (歌林苑)
	(ソ) 落花	98～102	後拾遺～詞花歌人
	(タ) 名所	103～105	金葉～詞花歌人

崇徳院に百首歌奉りける時、春の歌とて詠める

藤原季通朝臣